
B × G

夢のツバサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B x G

【Nコード】

N 9 1 9 5 C

【作者名】

夢のツバサ

【あらすじ】

ナチ・クリストファーは私立「バトル女学園」に入学しているごく普通(?)の16歳ですが・・・毎年この学園では世界対抗学園マッチが行われるバトル学校だった!!!?

バトリ伝記（前書き）

数少ない読者の皆様へ

この小説はいろんなネタを引っ掛けているので、分かりにくい所があるかもしれませんがその所は・・・
目をつぶってやってくださいませ。

バトリ伝記

夢をみた。筆で雑に塗られたようにあいまいだけれど……とても幸せででも、とても怖い夢。

その夢を見ていた少女は目を覚まし、窓を開けた。少し先に今にも飛んでいくくらい翼を広げた、鳥型の遺跡があった。そういえば……この前あそこからすごい何か見つけたっていつてたっけ。少女の目に遺跡が映った。

その瞬間、光がほとばしった。

「つつ！」少女が声にならない声をもらした。そしておそろおそろ目を開けると、少女のめのまえに光り輝く水晶玉が浮いていた。

『むお……う……とびた……つ……たたかえ……守れ……あの……を……』水晶が光の渦を巻き、少女に告げる。

「はい……わかりました。×××さま」

世界が揺らぎ星が一段と輝いたこの夜、水晶は少女を『守り人』とした。

数千年後

朝霧がたちこめ、一段と寒さをかもし出しているとき、一筋のひかりのみちが伸びた。それを合図に次々と光の道が四方八方に伸びていく。

朝だ。きょうは静かで平和な朝が来た。

「つぎやあああああああああつ！」

いや、訂正。きょうも、ナチ・フォースにはあわただしい朝がきた。「なんで?! なんておこしてくんないのぉ!! ピッチ！」

寝癖でクツシャクシャになった髪を必死の形相で直しているナチが、魔法高等ペット、略して『魔ペット』に向かって叫んだ。

【もう、何回も起したデス。っていつかナチの目覚ましになるのはごめんデスよ!】

黄色いはだにウサギのような耳、くりくりツとした水色のひとみ、そしてせなかに小さな純白のはね。一言で言うとう黄色いウサギに羽が生えたような生物が怒ったように、言う。

「うつ・・・まあそうですけど・・・」

【ほら、さっさと着替えるデス！早くしないと・・・今日は一時間目は体育ですヨ？】

「うつうつそ　　！ハンター先生！！？エマ・ハンター？！！」

【はい、そうですよナチ。ハンター先生は遅刻者に腹筋1000回をあたえるそうですね】

「軽々しく言うな　　！！こんクショー！他人事と思いやがつてえええ！」

ナチが恨みたつぷりにさけぶ。

【ほら、あと30秒でないと、遅刻ですよ？幸運を。ちなみに私はついていきませんからね】
しらっと、パイ

私立バトル学園

「っ！あと28秒！！？んじゃっ！行ってきます。パイ！！」

そう言うなり、ナチは電光石火のごとく、猛ダツシュ。果たして間に合うのか……？

【・・・今日も平和ですね。】
ぼそつとパイがつぶやいた。

第一章

「私立バトル学園」

「つつつセーフ!!! っしゃ奇跡! 奇跡だあー!!!」

チャイムが校庭に鳴り響く。それを掻き分けるようにナチの声が響いた。

その瞬間、ナチの頭に衝撃が走った。

目が回る・・・こりやオヤジに殴られたときの衝激だあ・・・あれ・・・？てか、あたいは誰さ？

ナチが混乱していると追い打ちをかける様に鋭い声が刺さる。

「つつつこおつらあああああ！……まっただなあ！……？
あああん？？」

ヤクザのようなこんの口調お……こっこれは……!!!

「このアタシ、エマ・ハンターの授業で遅刻するとは……いい度胸だねえ!!!」

やっぱり・・・!!!につくきハンターteacher!!!ああ・・・
腹筋1000回・・・

「ナチ……今日は腹筋＋スクワット10000回だよ」

「ヤクザ口調のくせに」
「なんてつけるなあ!!!」

ナチが心の中で叫んだのをハンターは見逃さなかった。

「おやおや、ナチイ あんたアタシのこと勘違いしているようだけ
ど・・・アタシはね・・・とおってもっ中身もカワイイ乙女なの・
・・・」

ふっ、あんたもお子ちゃまね・・・と言うような目でナチを見た。
「っっっ!!」

あんたに言われたくないよ!!と言うような目でナチも見返す。

ほお・・・今日は言い返したわね、ナチ。あなたもやっとな坊と
言うレベルを卒業したのかしら・・・？ と言う様な目でハン
ターも見返した。

こんな・・・腐ったオバちゃんに言われっぱなしはごめんですから
ねっ と言うような目で、

ナチもまた見返した。

訓練へGO！

結局、ナチは腹筋、スクワット共に1000回をやり遂げ、フラフラしながら、親友のイライザ・シャーンと共に2限目『戦闘術』の教室へと向かっていた。

「うっつ・・・腹が、腹が割れるうっう！」

「だよねえ〜」

「うっつ・・・太ももが、太ももがもげるうっう！」

「だよねえ〜」

「うっつ・・・ふくら」

「だよねえ〜」

あいまいな返事をするイライザになちはムスツとした。それさえも気づいていない。いつもはすぐ気づくのに。

「イライ」

「つきやああああああつ！！！」

と、いきなりイライザが叫んだ。

「なっ！」

ナチがあまりのボリウムに顔をしかめた。

「クロス先生ステキ！」

イライザがみつめる先に 金髪碧眼のかなりの美形な、クロス・ライト先生がいた。

「・・・・・・・・・・」

恋愛そのものに興味なしのナチにはポカーンとするしかなかった。

「シャーン君か、おはよう。」

言葉にすら『イケメンオーラー』がただようその言葉に、ナチを除く、通りすがりの女性達の乙女心がつらぬかれた。

「せんせえーっ！！！」

周りの生徒（女子）達がいつせいにクロス先生に突進していった。

「・・・・・・・・息・・・できな・・・い・・・っ」

ナチは自分自身の身の安全を確保すべく、『戦闘術』の授業をするため、更衣室へむかった。

しばらくして、ナチが真っ黒いスッパツと『勝つてやるぜ』とプリントされたＴシャツを着て、黒髪をきつちり束ねて、出てきた。
「っしやあー!!」

ナチは喝を入れると競技場へとむかっていった。

訓練へGO！（後書き）

くこれを見ていただいた読者様へく

是非、コメントを書いてくださいます！！

お願いですっ！！

選別委員会

戦闘競技場

「さて、これから戦闘授業を行います。」

エマ・ハンターの声が拡声器で生徒達に号令をかけた。

『おねがいしま〜すっ』

生徒達の声がややダルそうに続く。

それを見たハンターは拡声器を握り潰して、広い競技場に聞こえるような声で怒鳴りつけた。

「っ！こおらあああああ！！何だよその聞くからに軽く50代は行ってそうな老けた声は？！！」

こちららその若々しいピッチピチな体に戻りたいと常々願っているのにいよお！！？ああっ？！！」

「あゝあまた始まったね…ハンター名物『若さゆえに…』理論」

と、ナチがハンター理論に負けないような声で隣のイライザにつぶやいた(?)。

「ほんと…ああ見てよ、学園長が寝てるし。あの学園長が寝たということは…」

「絶対、3時間は続く…！！」

ナチが驚愕しながら学園長を見た。

歳のわりには生き生きとして、身長は120cmの超小人、しかし戦闘能力はこの世界で一番の実力

で、『小さい』と言った者を一瞬で半殺しにする。しかも予知能力を持ち合わせ、自分以外の

事を占うことができる。また綺麗な空色の瞳が印象的なバーさんだった。

「つまり……！アタシの体は死んでない……それは」

「ああ……早く戦闘授業がしたい……！」

そうナチが思った瞬間、いきなり競技場のドアが吹っ飛んで、ナチのそばに轟音をたてて落ち

た。

「……！」

ハンターは身構え、学園長はいつのまにかナチのすぐ横にたって前方を静かに見据えた。

砂埃の中から黒いブーツが見えた。

どんどん砂埃がおさまる中、砂埃の中から声がした。

「こんにちは」

その瞬間砂埃が一斉に晴れた。

中から黒いボディースーツを着こなしたクールな若い少女が姿を現わす。

「選考委員会です。」

－ 第四話・終 －

選別委員会（後書き）

なぞの選考委員会、その正体とは……！！？

B × G

『選考』

闘技場が生徒達の声でいっぱいになった。

しかし、何人かは『ぼおけえ』としていたがナチもその一人だった。

「ねえイライザ…線香委員って？」

ナチが、どうしようもない間違いをして、イライザに聞いた。

その瞬間、イライザは、ナチのほっぺを『にぎゅうう』とひっぱった。

「ひたい…！はなひていらいは…！…ひ…た…ひ…！…！」

「『痛い…！放してイライザ…！…い…た…い…！…！』 じゃなあ…い…！…！」

ナチの言葉を巧みに理解して、イライザが叫んだ。

「そうだぞ…！」

と、ハンターまで参加してきた。

「先生 このナチを真っ青なお空にブン投げたらどうなると思いま

す？」

「そおーだなあ〜1000mは行くなあたしのこの豪腕で……」
とハンターが鍛えられた腕を見せる。

「たしかに行きそう…絶対行きそう…！！」

ナチがイライザたちの末恐ろしい会話を聞きながら、涙目でさうた。

そこで、完璧忘れ去られた選考委員が、学園長を除く、全員に気づかれないよう銃を構えた。

「…私、影薄いんでしょうか…？」

そう言うと、少女は轟音を響かせた。

「……！！」

生徒が一瞬にして静まりかえった。

「私…忘れ去られるの嫌いです」

「あ…すねてる…」

と、皆がさうた。

「…で、今日はこの通り選考委員会からの使いとしてやって来ました。

用件はこうです、毎年開かれる少女コロシウム『B×G』の選手選考に来ました。

なので、1カ月後に選手選考バトルを行います。 以上です。」

みんなが反応する間もなく、少女は上空に飛び上がり、見えなくなつた。

「スゴイ脚力だなあー…いつか戦いてえ」

皆が唖然としている中、ハンターのんきな声でつぶやいた。

「…なんかすつごい事になったね、イライザ」

ナチが目をキラキラさせながら、イライザに問いかける。

「…のんきだね」

イライザは死んだような目で、ナチを見て、ため息をつくしかなくつた。

「ああ…遂に始まるんだな…バトルが…」

そして、イライザは青い空を覆い隠そうとしていた黒雲を見上げ、静かに思った。

B × G（後書き）

ひさっしぶりの投稿です まだまだ未熟ですが、応援してください
ませ

第六話

『命がけの訓練』

「つつわけで、訓練かあいっしー」

ナチが元気よく叫ぶ。

「…しつかしまあ　よお　くこんなジャングルで修行しようとおもったね…」

連れて来られたイライザがひきつつて言った。

ギアアギアアつと鳴く二つ頭のカラス、絶えずなり続ける『ドンドン』と言う不気味な音、

大木の幹の長さの5倍の大蛇がそこら辺からぶら下がっていた。

「ヤルなら…命がけの方が殺る気あるっしょ？」

「何を殺る気かよ…」

ペコちゃんみたく舌を可愛く出して、意気込むナチに、ぐったりしながらイライザが

つつこんだ。

「…ってかココどこ？」

「ジャングル」

「いや、絶対魔窟だとあたしは思う。断言できる」

イライザが不機嫌な声でそうつつこむと、ナチはしばらく『ここは』と言いながら、イライ

ザの周りをグルグルと回った後、

「イライザ長官！！行くぞ！！」

と言い、イライザの着ているＴシャツを引っ掴み、中へと連行していった。

「ちよっ…ナチィ！！アタシを殺す気が！！？」

「そんなことはないぞ！イライザ君！」

「だあゝかあゝらあゝ！！」

そんなイライザの反論も虚しく、ジャングルの魔窟に入っていた。

空を覆い隠し、日光を奪い合うように生えている樹木、豪雨が降り注いだ後のようにグチャグ

チャの地面、その湿度のせいで、長靴が『ペチャペチャ』と音をたて、ナチたちのTシャツもび

っしより濡れていた。

「ナア〜チイ〜くう〜ん…ココどこお〜」

「わ…わかんない…のですよお〜」

「ああ〜そお〜…っておい！！なんで？入る前に確認したんでしょ！？」

「…」

ナチが静かに笑みをうかべた。

「…わすれっちまったよ、そんなの」

ナチが、落ち窪んだ目で、ふつとはき捨てた。

「…！！なっ…なっなあああああああっ！！」

イライザの悲鳴が密林の中を駆け巡っていった。

第六話（後書き）

さてさて…命がけの訓練の行方は…？

…ご期待…！

レイ

「な・ん・で！あんたはいつつもそおーなのっ？！…もう、見て御覧なさい…っ！あなた迷う

からさっそく猛動物に『しめしめ…うまそおな人間はっけーん』とか言う風に見られてんじゃ

ない…！！ お母さんっお母さんそんな子に育てた覚えはありませんっ…！！」

と、恐怖を紛らわせる為、イライザが半ば自分を失いつつもナチに向かつて怒鳴っちゃいます

「ううゝんっ…ぐっ苦しいい…たあゝすうゝけえゝてえゝ…っ」

と、ナチが首を絞められつつ唸ります。

もうなにがなにやら。

そうやっている間にも、猛動物たちはじりじりとナチたちをかこんじゃっています。

と、その時。そう、戦隊ヒーロー顔負けのそのときでした。

黒い矢のように、誰かがかっこよく降りてきました。そしてもう倒すわ倒すわ…あっちゅーま

に気絶している動物さんたちがゴロゴロ…この間約2分。

「お…おおおおっ…!!」

あまりの速さにナチたちもビックリしちゃいました。

そのナチたちの命の恩人がふりむきます。

「…!!」

思わずイライザ（ナチ、論外）の感嘆のため息がこぼれてしまいました。それもそのはず…

荒っぱく刈り込んだ金髪に、鋭く、またどこか温かみのあるビー球のようなオーシャン・ブル

ーの瞳。なおかつ整った顔は少し焼けています… まあ一言で言う
と、とっても綺麗な16歳頃の男子でした。

「怪我…」

少年の簡潔なセリフにナチたちは一瞬眉をひそめました。

「… は？」

ナチたちが異口同音に聞き返しました。

それを見て少年はいくらか慌てたような感じであたふたとしたあと、
咳払いをしてこいいいま

した。

「けっ…怪我はないっかつ…!!」

どうやらかなりのくちべたのようです。それを見たナチはしばらくポケーっとしたあと、

「…ない。ありがとう」

と笑顔で答えました。（イライザは熱っぽい瞳で3分おきに『イケメン…』と呟いていました）

その少年は、耐えかねたように跳躍し、大木の枝へジャンプ。

「あのおっ！名前をつ…!!」

イライザがその少年の背中へ叫びました。すると「レイ・ディーゼオ」と返事がきました。

「レイ様…」

イライザはいつまでも、その少年の背中を追いかけていました。

「…ちよつとお…!!訓練はっ!?ねえ　っ!!」

ナチはそんなイライザをどやしつけましたいつまでも、そう、いつまでも…

レイ（後書き）

注：読者の皆様へ

今回は物語風にいたしました。そこんとこよろしくネ

あつ…そんな目しないで下さい（泣）

嵐の予感

「どうしようっ」「どうしようっ」

ナチと、イライザが生氣のない声で、つぶやいた。

二人の状態はすごいものだった。

足はひざまで泥がこびりつき、シャツはところどころが汗と泥でべっちよりで体にへばりつい

ていた。

顔も、湿度が高いこのジャングルでは汗だくで気持ちが悪かった。

「ああ…シャワーが恋しいっ！！こんな世界からおさらばしたい！！」

ひたすらジャングルを歩き続けながら、そんなことを漠然とおもっていた。

イライザもそんな事を考えていたようで、『シャツ…シャワー…ッ』とのどから声を絞り出し

ていた。

ナチはそんなイライザを一瞥し、空を見上げる。

空は、日光を奪いあおくと、伸びに伸びた樹木で覆われ、光は何一

つ見えてこず、昼だと言う

のに、ジャングルには薄暗い世界が広がっていた。

「これは試練だ…」

ナチが頭の片隅でかんじた。もう何日食べてないだろうか？水ももうほとんどない。

これが続けば、ナチたちの未来はない。

本当は食料が確保できるエリアがあつたはずなのに覚えてこない。全くと言っていいほどに。

ナチがそんなことを思っていると…

「ねえ、おかしくない？いくらなんでもこれはないって…」

うつろな目をナチに向けながら、イライザがいった。

「どっ…どうして？」

おなががすいて気持ち悪い胃を押さえつつ、ナチが聞き返す。

それにイライザが答えようと、口を開きかけて…

いきなり、背後の大木の上の方へと目をやり、投げナイフをかまえる。

「なっ…なにさっ！？」

あまりの速さに目を大きく見開き、ナチが叫ぶ。

その言葉に耳もかさずに、しばらく大木から目をそらさずに、やがて『ふうー』とため息をつ

いた。

「ん、ゴメン。気のせいみたいだわ。マジごめん」

投げナイフを腰に巻いたポーチに入れ込みながら、ナチにいった。

そして、さっき言いかけたことを、懇切丁寧に話し始めた。

「…うーむ。鋭いわねえーイライザ。なんで下級ランクに入れられたのかしら？」

さっき、イライザが警戒していた大木の上で選考委員長のエレン・ポーラがつぶやいた。

髪は落ちていたブロンド。顔は整っていて、肌には一点の曇りもなく、黒のドレスを着ていた。

そんな格好でどうやってここまで上れたのかは、作者も見当つきません。運動神経はいいらしいですが…エレンは。

そしてイライザがナチに話していることに耳を傾け、小さく笑った。

「ふふっ…鍵をつかんだのね…」

エレンは座っていた木の枝から飛び降りた。

「もっ…始まっているのだから」

そつつぶやくなり、彼女はきえた。

嵐の予感（後書き）

えーと…ひっさしぶりの投稿ですが…

皆様に楽しめていただければ幸いです（笑）

開始

「何がおかしいかって言うとな…食料ポイントが見つからないことよ！」

イライザがそう断言する。

どうもおかしいのだ、じつは密かに目印として、番号つきの小さい鉛球を落としていた。

それがある。地図通り歩いてるはずなのに。これはもう…

「幻術かもね。もう『B×G』選考始まってんだよ…予告なしに選んで本来の力を見る…」と

案外、選考委員ってすごいわ。さっすが」

素直に感心するイライザ。しかし…ナチは呆然とイライザを見ていた。

「すごい…いつからわかってたの？」

ナチが目を点にしながらいった。

「…！？ナチッあんた気づいてなかったの…！？今までの授業聞いてた？授業は寝る時間か！？」

イライザが顔を青くなりながらナチを怒鳴った。

「すっ…すみません」

頭をたれながら、イライザのお言葉を素直に聞き入れている。

「…とにかく、幻術やぶればいいんだね？」

「そーだけど…そう簡単には見つからないと思うんだよねえ…ナチ、あんたは戦闘専門でしょ？幻術イケル人いたらなあ。うーん。」

イライザが頭の後ろで手を組みながらぼやいた。

「イライザ、なあ…んかこつち怪しいんだよねえ…空気みたいのがこつ…ぐにゃあーつと…」

ナチが北東の方向を指して言う。

「ナ…ナチ、でかした。へえ…幻術けつこつ才能あるんだね。ナチにしちゃ以外。」

イライザが関心のない声で、ひとしきり言うと、北東の方角へとずんずん進んでいく。

「あつ…！ずるいつ！あたしが見つけたのに！」

「いいじゃん、別に。あたしの腹がもう限界に達しているの。腹ぺこなのだ。」

蒸し暑いジャングルの中で、ナチとイライザの口論がしばらくの間ひびきわたった。

そのころ、学園内のどっか。

「お知らせします、エレン様。」

全身黒の服で統一した少女がエレンが座っているイスの前でひざまづいて、そういった。

ここは、校長に許可なく選考委員がぶん取っているいわば、『基地』だ。

みつかったら、あの校長はこの委員会の基地をめちゃくちやにして、笑顔でこうつぶやくだろう。

『次に私の庭で許可なく遊んでごらんなさい。命はありませんよ』と。

それはさておき

「報告…ね、何人気づいたのかしら？今年校長によると豊作らしいのよねえ」

ため息交じりにエレンはいった。しかし、

（ふっふっふっ…おもしろそうねえ。すこし遊びにいったらおうかしら。今年は豊作だから、選

ぶのはめんどくさいけど。）

と、遊園地に行く前の小学生みたいな笑顔でそうつぶやいていたり

する。

「…あの選考場所にいるのは15人で、その内の9名です。他の人はいないじてんで落選です。」

少女が、静かに報告する。

「まあ…今年はずいぶん熱心じゃなかったのねえ。落選者がいっぱい…」

「予告は1ヶ月後でしたので、無理はないと思います。」

エレンの感想に律儀に理由を述べる少女。それにエレンはむっとした。

「わ…わかってるわよ！それくらいね！」

あわてて、見栄を張るエレン。はつきりいつて大人げない。

うってかわって、少女はエレンと違って立派なので、こういった。

「そうでしたか。さすがエレン様です。」

無理に、感動したような声をつくり、エレンの機嫌をとる。部下はつらいのであった。

開始（後書き）

さて、始めました！選考！（一人で盛り上がる作者）

次回も頑張つて、書いていきたいと思えますので。

では…また。

レヴィとベル

「まったく、いやんなっちゃうねー。こっぴうのって」

蒸し暑いジャングルのなか、汗一つかかずに一人の、気の強そうな美女がつぶやく。

少し、赤みがかかったブラウンの髪をお団子に結っていて、赤のタンクトップと麦色の短パン

をきこみ、いかにも活発な感じをかんじさせた。

『レヴィ様…あつい…』

大木の陰から、落ち着いた少女が聞こえた。

「えー、なっさけないね。それでも『魔ペット』？」

『『魔ペット』を買いかぶりすぎ…。』

そして、大木の幹から、影がひょっこり現れた。

『人がた『魔ペット』だからこそ、人間の症状にちかい…』

そう、声を荒げ（？）少女が言った。

人型の仏頂面の美少女だった。魔ペットだというのに！

「まあ…そんな格好してりゃね」

実際、そうだった。

白の膝丈ワンピースの上に、白地に金縁のボレロ型のジャンパーを着込み、鍔の広い白い帽子

を目深にかぶっていて、いかにも熱そうだった。

「ほら、いくよ」

レヴィと呼ばれた美女が手まねきという。

魔ペットの少女は仏頂面のまんまで、レヴィの背中にちょこんと乗っておんぶしてもらった。

「まったく、甘えんぼだねー…ベルは」

そう、レヴィがいった瞬間、魔ペットのベルが『ぱこっ』と頭にチョップを下した。

「いったいわねー…」

『レヴィ様ひどい…』

広い帽子のつばの影が、ベルの顔を暗く照らした。

その効果もあってか、いつそう不機嫌さが伺えた。

「…はいはい。でもアタシは悪くないわよっ！？いい？！…この場合アタシが謝ったわけじゃない

からねっ!？」

「…」

ベルは、主人の素直さのなさにあきれ返った。

いつものことだから慣れている。いったい主人はいつになったらすなおになれるのだろうか？

そう、空を仰ぎながら、心の中でベルはつぶやいた。

空はかすかにゆがんでいた。

レヴィとベル（後書き）

ついに出版しました。作者のお気に入りのキャラ、ベル。

じつは、クラスの子をモデルにしているんですよ（笑）
書くのが楽しみです。

集まっていくな勇者(?)

ゆがんだ空間にはいった瞬間ナチ達は背中に冷水をかけられた感じがした。

「…暑かったからちようどよかったわね、ナチ」

イライザが気分の悪そうな声でいった。

「……」

ナチがこめかみを指で揉み解しながら、うなずいた。

どうも気分が悪いらしい。イライザはそれ以上訊くのはやめて、コンパスをポケットから取り

出す。

コンパスの針は完全にイカれたらしくグルグルと高速で回っていた。

「……」

さっきまで、きっちりと自分達に方角を教えてくれていたコンパスが、この空間に入ったら、

お釈迦になってしまった。

(いったい、この空間はなんなのやら…早く抜けて、シャワー浴びたい……)

さつきから、不快な虫がゾツとするような羽音をたてて、通っていく。

このまままっすぐ行けば食料ポイントにつく様だった。なんせ幻覚の空間にあるんだし。

そう、イライザが考えていた時…

『どばばんっ！』『ずしゃっ！』と、音がした。

いそいで彼女は180度方向転換し、武器を構えた。すると、そこには敵が なんてこともなく、

小さな女の子を、おんぶした活発そうな少女がいた。

『レヴィ様、人』

おんぶされた少女が言う。

「あ、きみさ、コイツの連れ？」

レヴィと呼ばれた少女が、間髪いれず、イライザの眼前に泥まみれの物体をつきだす。

「…これなに？」

イライザが物体から間合いをとって、げっそりとした表情を向け、レヴィとよばれた少女に

訊ねる。

もう、『ややこしいことはたくさんだ!』と叫びそうな勢いである。すると、泥まみれの物体が、もにもによと動き、レヴィの腕から逃れた。

そして、ゾンビ(?)のように、超ハイスピード・報復全身でイライザにおそいかかった!

「つきやああああああああああ!」

イライザは、たぶん自分の人生で最大の悲鳴を上げ、物体から逃げ惑う。

物体も負けじと追いまわし 最後には彼女の足をつかんでたりする。

「ひっ!」

青い顔で裏返った悲鳴を上げるイライザ、彼女のの運命やいかに!

(ここで、筆者は、黙考する。ホント、『おもしろいっ!』言わせ
るのって大変ですよね…)

集まっっていく勇者(?) (後書き)

ふう、何とかけたっ！

遅いとは思いますが、頑張って皆様に面白いっ！
っていつてくれるようがんばりますw

命がけの選考

前回、不思議な物体に追い回されて、ついにつかまってしまった
イライザ…

その物体の正体とは…！？

「ひっ！」

イライザが短く悲鳴を上げた。

ああ…もうおしまいだわ…たった16年の命、短かったわね…

などと、イライザが勝手に覚悟を決めたとき…

「ひどいよお…イライザア…」

泥まみれの不思議な生命体が声をあげた。

しかも、聞き覚えのある声で。

「まさか…ナチツ！？」

真っ青な顔に冷や汗を浮かべて、イライザが叫んだ。

そして、レヴィと呼ばれた少女たちのほうを向くと、

『やっと気づいたんかい、あんた』とでも言いたげな顔で、こちらを眺めている。

「な…なんでこんな風になっちゃったのっ！？ナチィ！」

イライザが混乱の極みに達し、そう叫んだ。

「いや、その…いきなり『ピピッ』って音がした後、泥みたいなのが降ってきて…」

と、そうナチが言ったとき、ぬっと森の奥からトラが出てきた。

「！」

そこにいた3人（ベルは相変わらず仏頂面）が青ざめた。

そしてトラがイライザに向かって走り出す。

「ひっ！」

イライザが短い悲鳴を上げた直後…

「グルルルッ！」

トラが低いうなり声を上げた直後…

『ピピッ』

瞬間、トラの右足が乗っていた位置から炎と爆音が膨れ上がり、トラの巨体は弧を描きなが

ら、30mかなたの森へと消えていった。

「……」

爆発地点にほど近かったイライザとナチは爆風をつけてもんどりうち、レヴィとベルはしりも

ちをついた。

「たぶん……ここら一带畏だらけだよ」

ナチがボソリ…とつぶやいた。

その場にいた、3人（ベルは相変わらず無表情）が一気に顔から冷や汗を流しだす。

とにかく逃げよう！

ナチとイライザ、そしてレヴィとその背中にチョコッンと乗っているネルが、果敢に一步を踏

み出した。

二分前

「ふむふむ…みんな苦戦しているようね。」

巨大な森のあちらこちらから、爆音と濃密な煙がわきあがり、悲鳴と苦痛な泣き声が響いてく

る光景を、上空を飛行中のヘリから双眼鏡で楽しそうにエレンは眺めていた。

「…そのようですね」

エレンの脇にたつて、そうコメントした黒衣の少女が、その様子を顔には出さないが、

『この人が私の上司…か』と、あきれながらつぶやいてたりする。

その直後…

ずばおおおおおんっ！！

森の中心部付近からひとときわ大きい爆発音と共に、巨大な爆煙が立ち上った。

「あらまあ…ひっかったのね…」

エレンが、瞳をキラキラさせてそうつぶやいた。

その様子に気づいたのか、キャビンの方の操縦者の声が聞こえてきた。

「へえ…何にです？」

と、外の方も見ながらエレンに尋ねた。

「貴様：仕事中だぞ。気を緩めるな。それに（仮にも）この方（この人）は貴様よりはるかに地位

が高いのだぞ。身分をわきまえろ」

と、黒衣の少女が眉間に深いしわを作りながら注意するが、エレンはそれを無視した。

「仕掛けたのはねえ…私のお手製の超高性能爆弾よ」

「……………」

「いっやあゝまさか引つかかってくれるとは…きっとみんな重傷でしょうねえ」

子供のような笑顔を浮かべて、さらり、とそんな容赦のないセリフを言っただけのける目の前の

上司に恐怖感を覚えたのか、操縦者は黙り込み、静かに十字を切り始め、被害者の冥福を祈り

始めた。

黒衣に少女は、操縦者のその行動を『仕事中だぞ』などとしかる気などこれっばちも湧かず、

「そのまま続けてやれ」

とだけ言い残し、静かにあの、爆心地を哀れみのこもった瞳でながめた。

その爆心地とやらが、ナチたちがいる場所だったりする。

命がけの選考（後書き）

…いやあ、ナチたちは無事なんでしょうか…

ちよつと作者にもわかりません。ぐすんっ。

ちなみに、エレンのキャラですが、わたしの姉がモデ

ルだったります。

…ホント怖いです。ハイ。鬼です。

能力

「…うう…げほっ、なんなのさ…」

ぼろ雑巾みたいにあちらこちら、よこれ、気絶しているイライザたちの中でひとりナチはかる

うじてそうつぶやいた。

なんで…あたしだけこんな罠に二回もはまるんだろう…。過去に村長さんのカツラをかくした

せいだろうか。それとも、サボって校長のおかし全部食ったむくいだろうか…

などと、こんだけひどい目にあったせいか、かなりネガティブに過去の罪の数々を振り返る。

そんなこんな、振り返ってる間に、残りのメンバーが起き始める。

「ぐっ…なんなんだこの罠！殺す気かつ！」

起きるなり、大声で叫ぶレヴィ。さっきの罠のダメージなどどこ吹く風だ。

「たし…かに…ね、こりゃ本気で殺す気だったんじゃない？製作者にもう純すいに殺意しかわ

かないわ…マジで」

と青筋浮かべながら、イライザが言い放った。

「…と、とにかく早く行かなきゃ…ね選考って言っても、リミットはあるはずだし」

そうナチがつぶやき、ヨロヨロと立ち上がる。残りのメンバーもそれに習って歩き出した。

（ベルはおんぶ）

そういつて、一同は歩き出す。

しばらく行つて、分かれ道があった。腐りかけた木の看板があつて

『左は…こ…け右は…が…つて』とところどころ腐つてて見えない看板だった。

「なんじゃこりゃ、頼りになんないねえ」

汗をぬぐいながら、ナチがつぶやく。きっとオチからすれば、どちらかが崖である。

ここはどう選ぶべきか…

『じつち』

いきなり、レヴィにおんぶされていたベルがほっそりした指を左の

方角にさしながらいった。

「そっか、じゃあこっちな」

とナチとイライザが頭に『はてなマーク』をいくつも浮かべてる中、さっさと歩き出してしま

う。

「ちよっ…ちよつとまって！」

さっさと左にいくレヴィをイライザが呼びとめる。

「？」

「いや…そのですね？どーして左なんでしょうか…」

遠慮がちにイライザが聞くと、レヴィは『ああ』と小さくつぶやいた。

「そーいやまだいってなかったわね、ベルはねちよつと特殊な能力があつて…」

レヴィがそう切り出したとき、おんぶしたベルが肩越しにこちらを向く。

さっきまで空色だった瞳が、金色になっていた。

能力（後書き）

ども、作者の夢のツバサです（・w・）

冬休みの宿題が思いのほか終わらないし、年賀状は

ありますわで…12月いそがしい…

でも！それを乗り越えるのだ自分っ！

ってことで、また投稿は遅くなりますけど、実力考査

が終わったらソッコ―書くんぞ！

ではっ 良いお年を（・w・）

予知

「ベルはね、霊能力が備わってる魔ペットなのよね。だから、瞳の色が変わるところという事け

っこうあたるワケ」

おんぶしているベルを指差しながら、得意げにレヴィはいった。

「へえ…すごいね、ベルちゃん」

「うわぁ！超すごいじゃんっ。うちのピィとは大違いだよ！」

と、口々にイライザとナチが感心した。

レヴィは『もつと褒めたたえなっ！』といわんばかりに、胸をそらしている。

ベルはそんなご主人をあきれた目でみやった。

「さっ、行くわよおっ…！」

レヴィは賞賛の眼とあきれた眼が入り混じった視線の中で、意気込んだ後、ずんずんと左の方

向へ進んでいく。

その時、めずらしくベルがご主人さまの背から飛び降り、自分の足で歩き始めた。

「あらっどつしたのよ。ベル。いきなり降り……」

と、さっきまですぐ前をあるいていたレヴィが言葉の途中で消えた。

『！』

ナチとイライザが驚いてる間にも、ベルもすぐに消えてしまった。

「いったいどういうこと……」

と、居なくなつた付近に近づいていたイライザの姿も途中で掻き消えた。

「イライ……」

ナチが驚愕した表情で、イライザが居た場所に走りよつた。

その瞬間、足元から地面がきえた。

「え……？」

下はとんでもなく深いがけ。落ちて行つてるイライザたちが豆粒みたいだった。

ここでふわり、とジェットコースターで降下するときのいやな感じが襲ってくる。

ちなみに、ナチはものすごいジェットコースター恐怖症。

「きゃあああああああああああああ
…」

しばらくの間、谷にナチの高い絶叫が響いていった。

予知（後書き）

ごめんなさい（土下座）

ほんと、実力考査が終わってから書くとかのたまっておきながら…

こんなに遅れてしまいました。

ごめんなさい、もう…しません（たぶん）

次回は…2月27日更新予定です

落ちていく先は…

死ぬ。死ぬ。死ぬ。

底までかなりある。こんな深い谷が学校の訓練場にあつたなんて思つても見なかった。

半分、ナチは涙目になって、そう心の中でおもつた。

いま、ナチは重力にどんどん、ひっぱられていた。

先に落ちた3人はいつたいどうなったのだろうか？

無事だろうか？それとも…

その瞬間、谷底にみような違和感を感じた。そう、まるでこの感じは…幻術だ。

すると、足先からどんどん冷たい感覚が走っていく。

さっきまで谷底だった景色が薄い七色の膜となり、ナチはそのまま膜につっこんだ。

膜の内側内はマンション2号室分が丸々入り込めるくらいの空間だった。

底にはクッションが敷いてあり、ナチはそのままクッションに激突する。

「っ！」

膜に突っ込んだときに、衝撃がやわらいだらしく、思っていたほどは痛くなかった。

「…ふう、助かった」

げっそりした声でそうつぶやき、ナチが顔をあげると、目の前にイライザが立っていた。

「ああ…ナチ。よかった、来た」

イライザは、疲れた顔でそう弱弱しくいった。

その向こうでは、レヴィがココアを一気飲みしていた。（ベルはつつ立てた）

レヴィはぶはつと、ひとごちついた後、ようやくこちらに気づいて大きく手を振った。

「……は？」

ナチはぽかーんとした表情をつくって、そうつぶやいた。

「ナチ、とりあえずこれ飲んで…落ち着くよ」

そういつて、イライザが熱いココアの入ったマグカップを差し出した。

「…うん」

ナチは言うとおりに、ココアを受け取り、一口飲んだ。

のどを通って、ココアがすぐにじわり、と身体をあたためてくれた。おいしい。やっと、生きた心地がしてきた。一時はどうなるかと思っ
たし。

そうナチがココアを楽しんでいると、上から何かが落ちてきた。

人だ。しかも男だ。金髪にオーシャンブルーの瞳…たしか、レイ
つて人だ。

「あつ…！レイ君っ」

イライザがたちまち頬を高潮させ、レイにむかってそういつた。

レイはナチたちを見て一瞬目を小さく見開き、口ごもりながら、挨拶をした。

「まさか…ここにたどり着くとは、びっくりした」

小さくレイがつぶやくのを見てナチはたずねる。

「どづいづいと。」

「いや…ここは一番目立ちにくいってか、たどり着くのが難しいゴール地点なんだ」

「…へ？」

ナチが思わず聞き返した。いま、あんたゴール地点って言わなかった？

レイは特に気にした様子でもなく、もう一度繰り返す。

「ここは、いくつか設置してあるゴール地点の一つだ。…っていった」

しばらく、ナチは目を大きくみひらいたまま固まってしまった。

落ちていく先は…（後書き）

はい、約束どおり2月27日に更新することが出来ました！
次回は、B x Gの設定について語りまくるやつだったりします。
めんどくさくなかったら見てください（・w・）

設定／筆者のどうでもいい努力の集大成／

えーっと…今回は予告してた通り、設定を公開しちゃうということ
で、辞書風にしてかきま

す。（なぜこれを企画したかというと、今説明しとかないと後々
大変な事になるから）

みなさんは『ふ〜んこんな設定あつたんだ。』程度の目でみててく
れるとうれしいな…

とおもってます。ではではスタート

#バトル学園#

世界つても、10校近くしかないバトル専門学校の中の1つ。バト
ル専門学校のなかではトッ

プクラスの部類に入るけっこうすごかったりする学校。

#B×G#

『バトルガール』の略。バトルガールは世界対抗バトルにでれる選
手のこと。

『あれ？物語になんか男の子でてね？』と思っただ方。大丈夫です。
彼はそれなりの理由で

でてます…から…ね…（汗）

#選考委員会#

え〜とですね。これに関して、ちょっと手違いがあつて、『選考委員』が『選別委員会』

つてなつてゐる話があります。ごめんなさい（-w-;）

正しくは『選考委員会』ですので。覚えててくださいねw

ここからちよつと文章入れますね。

え〜つと、世界対抗バトルはとある、浮遊している島『バトルアイランド』でおこなわれてま

して、そこには、いろんな地形を再現しているバトル・フィールドがいっぱいあり、そこで観

客は入島料金を払ってバトルを生で見ることが出来ます。

その観客にポップコーンを売ったりしている店や、土産屋まであります。

そして、観客はどっちのチームが勝つか、試合で賭けをする事が出来ます。

『俺は チームに賭けるっ！』という場合は チームの『賭け

チケット』の購入をします。

注意：ここでいう『賭ける』というのは『負ける』に賭けるという意味です。

そして、試合開始前に、モニターで賭け金額が出されます。

例1） チームに賭けた（負けると賭けた）人が多い場合：

チームにかかる金額が多くなります。そして、 が負けたら、

（相手チームにかかっていた金額＋かかったいた金額）÷かけた人数¹¹ もらえる金額

もし、 が勝つたら、

なんにももらえません。 チームに賭けたお金は全部相手チームのかかった金額に加

えられ、相手チームに賭けた人たちに分けられていきます。

注意：負ける確率が高いほど、かかる金額が高くなると思ってくれたらわかりやすいと思います

す。

あと、賭けたお金は、勝ち負けによってですが戦ったB×Gに分けられてたりします。

で書くの忘れてたので補足しました。

あと、観客にはその日戦わないB×Gや世界中のバトル専門学校の生徒達や教員もいたりし

ます。

バトルアイランドで試合が行われるのは1週間〜2週間程度です。
出場チーム数で期間が決

まります。

世界対抗バトル専門学校リーグは一般の人が長期休暇をとって家族
総出で行くくらいの人気

ぶりで、開催者の世界各校の校長と島の管理者達はウハウハ大もう
けです。

#ですね、世界対抗バトルに優勝したチームはマフィア壊滅など
を行うイーグルガール略し

て『E×G』になれます。この職業はバトル専門学校の女の子達に
とってはあこがれの職業

です。たとえ世界対抗バトルに優勝できなくても、2位3位にはい
れば、『E×G』選考テスト

でクリアすればなれちゃいます。クリアできれば…の話ですが。

ちなみに『B×G』の選考に落ちちゃった生徒は来年の選考をまっとうけます。

でも、受けられるのは7回まで7年生で卒業です。だから、1年生で『B×G』に

なれる生徒もいれば、7年生でもなれず涙をのんで卒業…という生徒もいるのです。

あと、ナチたちの世界には『霊力』が使われて戦闘したりしています。

試合で最初に『今回は霊力使用なしです！』とか制限をいわれ、それにあわせて戦闘してます

銃弾でも世界には霊力を帯びさせて弾をうつ銃が一般化してます。

電子機器とかには使われてません。電力の方が供給が安定してるし、大量に発生できるから

です。魔力も一応は確認されてるんですが、それは『B×G』や『E×G』関係の人しか知

りません。第一ほとんどの人間にはほんのちょっとしかないんです、魔力が。

だから、戦闘とかは、霊力がつかわれます。魔力はいろんな所での戦闘の歴史でも一回も出

てきてません。

ちなみに、魔力と霊力はそれぞれ反対の性質をもっています。だから霊力を魔力で相殺する

ことも可能。

… ふう、こんなものでしょうか。なんか辞書風とかのたまっておきながらほとんど文章です

ね。ごめんなさい。最後まで見てくれた方、ありがとうございますw

もし、私の執筆力のなさで物語上でわからないとかがあったらこれを見て解決してください

それでもわからなかったら、遠慮なくコメントをよこしてください。答えを返信します。

では、次回も見てください。がんばって執筆しますので！

設定ゝ筆者のどうでもいい努力の集大成ゝ（後書き）

ずいぶんと長くなってしまった…（ - - ; ）

これを読破してくださった方はかなり疲れたと思います。でも読んでくれて有り難うございます

この設定は前から説明するべきだったのに、執筆力のなさで書けなかったことでして…：こうやってまとめることが出来てとつてもうれしいですw

皆さん、これからまだまだこの物語は続きますが…

がんばって書き続けるので応援してください！

次回更新日は明日ですw

ゴールとそれから…

『…ここ、ゴールなのっ!?!』

しばらく固まっていたナチとイライザは声を合わせて、そう叫んだ。

「ああ…そうだけど。気づかなかったのか？」

レイはびっくりしたような顔でそういった。気づいているものとおもってたらしい。

くっ、なんかすんげえムカつく…!

レイの表情がなんかカンにさわったので、ナチは心の中でそうおもった。

だが、イライザは全く思わなかったようで、『ぜんぜん気がつかなかったわ…さすがレイ君』

などと、キラキラさせた瞳でレイをみつめていた。

一方のレヴィは途中で気づいていたらしく、驚いた表情を浮かべてはいなかった。

ベルがこっちの方向を指したのだ。たぶん何かがあると踏んでいたのだろう。

そういえば…レイって人男だね。何で女子学校の選考中にいるんだろう。

ってか何者だろ…

ナチはふと浮かんだ疑問をぶつけてみることにした。

「…というか、何でレイ君…はここに來たの？ウチの生徒じゃないよね。男だし」

「ああ…オレはこの学校に所属している情報屋。たぶんオレ以外にも何人が所属している

と思う」

「へえ…情報屋なんだ。カッコイイね！そっいうの」

とイライザが途中で割り込んできた。まったく…恋する乙女は盲目だ。

「ありがとう。…で、オレは今回の選考を校長に報告するのが任務だ。」

「ふうーん…あんた年いくつなわけ？」

などとレヴィも参戦してレイに質問をみんなで浴びせかけると、上からなにかが落ちてくる

「…！」

レイはその何かにいち早く気づき、ものすごいスピードでこの膜の中からでていった。

「あつ……」

イライザがそういった時、それは膜にはいつてきた。また人だ。ただし、今度は少女だ。

赤毛のショートに、小麦色の肌。赤茶色の目は大きく、利発そうで、強気な雰囲気を感じさ

せた。服装は白のキャミソールにジーパンというラフな格好だった。

「あゝ……やっと着いた。ったく、エレン様も人使い荒いんだから。」

少女は大きく伸びをして、身づくろいをした。

そして、ポツカーンとした3人にむかって元気よくこういった。

「こんにちはっ！選考委員会のものです。貴方達が合格者ですね？」

ゴールとそれから…（後書き）

はいっ！予定通り更新できましたw
物語りもやつと序章から抜け出せたかな？…って感じでは
次回もよんでくださいwそれでは

リンダ

「えーっと…改めまして、私は選考委員会のリンダといいます。以後お見知りおきを」

今回、貴方達は見事合格されたんで、こちらに説明も兼ねてお迎えにきました。」

赤毛の少女、リンダは自己紹介を簡単に述べた後、そういった。

「…ほんとに合格なんだあ。やった2年生で合格できるなんて」

と、ナチがあっけにとられていた3人の中で一番最初に言葉を発した。

「お、おお…なんかそうみたいだね。実感わかないけどさ」

「やった。受かった。うれしいわ。ね、ベル」

『……………』

と、つられて残りの2人と一匹がコメントをしだす。

そして、リンダはその頃合いを見計らって、言葉続ける。

「…こっほん。と、言うわけについて来てくっださいね」

そういつて、リンダはいつの間にか持っていたリモコンのスイッチを押し込んだ。

ゴゴゴゴゴゴゴッ

と重たい地響きがしたかと思うと、ナチたちが立っている地面が割れて、何かが上昇してき

た。

ナチたちは、あわてて跳躍してそれをよけた。

出てきたのは… 普通のよりかなりでかいトランポリンだった。

「……は？」

3人がその、カッコイイ登場を果たしたトランポリンの使用意図の理解に苦しんでいると、脇に

いた、リンダがさっさと、それにおもいつきり跳躍して… 空高く飛び上がった。

「お…おおおおおおおおっ！」

3人がそう歓声を上げている間にも、リンダはどんどん上っっている。

このトランポリンは特殊製らしく、跳躍出来る高さが半端ではない。

「ほいじゃ、いきますかと…」

使用意図がわかったので、レヴィはそう言つと、さっさと飛び乗っ

て、跳躍した。

続いて、ベルも。

「あ、いつちやたね。んじゃ、私が次いつていい？ナチ」

「あ、うん。いいよ」

そして、イライザも、『うおっし！』と気合を入れると、空高く跳躍した。

「……よし」

最後のひとりとなった、ナチは、トランポリンをみつめ、そうつぶやいた。

合格。去年受かんなかったけど。ついに合格した。

『B×G』になれるんだ。

そう思った瞬間、やけに心臓が高鳴った気がした。

そして、ナチは助走をつけて、トランポリンに思いっきり飛び乗った。

グンツと身体が持ち上がる感覚がして、気づくともう60mくらいの高さまで、上っていた。

気圧の移り変わりの激しさに、耐えながらも、ナチはそっと笑顔になった。

不思議だな…この谷を落ちるときは怖くて仕方がなかったのに。

今は、こんなにもうれしくて、ワクワクしてるなんて。

リンダ（後書き）

・・・久しぶりの投稿となりました（- -;）
待った方：いたらすみませんっ！

っと、今回はちょっと短めの投稿となりましたが、
もうすぐで春休みなので、週末からバンバン書いていきたいとおも
ってますので

みなさん、よろしく願いしますw

では、また読んでくださいませ （> <）

金髪の少女

あの、トランポリンでがけを上って、ボートで川を下ること一時間。ようやく、小さな集団が見えてきた。その、小さな集団こそが、合格者と選考委員の人々だっ

た。総勢20人弱がナチたち3人を迎えた。

ナチたちは、受付で、合格者名簿に自分達の名前がしっかりと書き込まれたことを確認して、

ようやく安堵のため息を漏らした。

「ふあゝ…なんか久しぶりに安心した気がするう」

ナチは、係りの人からもらった、ココアをすすって、そうつぶやいた。

それに、残りの二人と一匹がこっくりとうなずいた。

「…たしかにね。なんか森に入っただのが遠い昔のような気がする…」

イライザは湖水のような穏やかな瞳で空を見上げた。

『なごむねえ…』

3人でそう、和やかな表情でハモツた。

穏やかなひと時。苦勞の跡だと甘いものが数倍美味しく感じられた。

と、その時。

「あ…ナチ…？」

と、凜とすんだような、きれいな声が聞こえた。ナチが顔を上げると、淡い金髪に、雪のよう

に白い肌。翡翠の瞳が印象的なきれいな少女が立っていた。

「クリスツ…！」

ナチは、空色の瞳をキラキラさせて、叫ぶと少女に飛びついた。

「わあ、久しぶり久しぶりっ！元気してた！？クリスツ」

ナチの元気いっぱいの声に、クリスは微笑むと、『元気よ』と女神のようなまなざしでそう返

す。

イライザは、少女の美しさに目を丸くし、レヴィは口元をヒクヒクさせながら『ま…まあ…性

格は…どうだか…ね。ねえ、ベル！？』と必死にベルに同意してもらおうとする。

ナチとクリスはしばらくキヤイキヤイ話した後、クリスは『またね』と選考委員会の方へ去っ

ていった。

「はあゝ！ー！相変わらず女神みたいな優しい子だったあゝ」

と、ナチは満足そうな笑みを浮かべる。

「私、ナチとあの…クリスって子が知りあいだなんて、いまだに信じられないわ」

「そうそう。ナチ、あんな子といつ友達になったの？」

レヴィとイライザに質問され、ナチは胸をそらし、ピースサインを作る。

「一年のとき、学食で。私がお財布忘れたときに、お金貸してもらってから！」

ナチはふと、過去の記憶をたどる。

あの時、イライザがお休みしていた日のことだ。その日、ナチが駆けつけてきたとき、大盛り

カツが売り切れ寸前だった。だというのに、自分はお財布を忘れてしまった。

いつもは、忘れないのに。ナチがもはやここまで…と覚悟を決めたときだった。

クリスが680円をナチにさしだして、あの女神のような笑顔で、

『これ、良かったら使って?』

と言ってくれた。あのときの感謝の気持ちは忘れない…そのおかげで、自分は大盛りカツを食

べることが出来たのだから…

「…なんか、ただの昼ごはんなのに、回想がスゴイ壮大にされてるわね」

レヴィがそう、あきれたようにつぶやいた。その時ライザはふと、何かに気づいたように、

顔をあげて、遠くにいるクリスの横顔をみつめた。

「思い出した…あの子、スポーツ雑誌に載ってた。スゴイ有望で、何でも一年生のとき選考に

受かったって…で、去年あんまりにも早すぎるからって、一年学習措置をとられた人よ」

『!!--』

ナチとレヴィが一斉にクリスの方へ振り向いた。

クリスが楽しそうに委員の人しゃべっている。心なしか委員の人は緊張しているように見えた。

『一年生で…合格』

今まで、選考で1年生は受かったことなどなかった。それくらい選考は技術と、体力と、めげな

い精神が必要な、難関なテストなのだ。

それをパスしたとなると…かなりの資質の持ち主だ。普通では考えられない。

今年、校長が『豊作だ』と言っていたが、たぶんこの事をさしていたのだろう。

「今年は、すごい試合になりそうね…あたしらも頑張んなきゃ」

イライザの言葉に、ナチとレヴィ（と一匹）は静かにうなずいた。

その瞬間、空に花火が打ち出される。選考受け付けの終了合図だ。

「以上を持ちましてッ！選考を終了させていただきます！」

選考委員の者が力いっぱいそう叫ぶ。ナチにはその声がやけに大きく感じられた。

金髪の少女（後書き）

…ごめんなさい、すっごい遅くなりましたね

待っていてくれた方申し訳ありませんでした！（土下座）

これからできる限り早めに投稿します（-w-）

次回の投稿は…明日ですッ！！

終わりとそれから

その場で『ワッ!』と歓声上がる。選考が終わり、正式に自分達はB×Gになることが出来

たのだ。

「よっしゃあ!」

ナチは拳を天へと突き出し、そう叫び、イライザは『ああ〜終わったあ』と、その場に座り込

んだ。レヴィは『終わった、終わった。』と大きく伸びをしていた。

そんな歓声のなか、二人の人間が空から降ってきた。

どちらも黒の服に身を包んでいる。あれはエレンとその部下だ。

二人は、地面に降り立つ。

それを、ここにいる全ての人間が注目していた。

エレンは簡単に身づくろいをする、部下から拡声器を受け取り、おもむろにいう。

「みなさん、初めまして。選考委員長のエレン・ポーラと申します。こっちは私の部下。」

エレンの紹介に、隣にいた部下の少女は丁寧にお辞儀をした。

「この後、名簿を基に正式に『B×G』に登録しますので、みなさんは一応解散ということに

なります。詳しいことは後日改めて。以上！」

エレンの簡潔な言葉に、もうちょっとなんか話があると思っていた人々は、少しきよんとし

たが、素直に帰っていった。

疲れ果てたナチたち一行を迎えたのは、先ほど『B×G』の選考があつたと聞かされた、同級

生の大群だった。その迫力に、心身ともに疲れ果てたナチらは思わずため息をついたが、誰も

そんな事を気にもせず、ナチたちに素直におめでとうと言ったりしたが、中には明らかに悔し

そつにしている生徒達もいた。

無理ないよなあ…とナチは思った。熱意のある生徒を選ぶとはいえ、選考は一カ月後だと聞か

されていたのだから、納得できない人がほとんどだろう。

そう考えてみると、自分達の運のよさにかなり驚いてしまった。

しかし、そんな驚きをもみ消すように、やれどんなのだった、とか受かったのか？、などの

質問が押し寄せていたので、手短に答えながらナチとイライザ、レヴィ（＋一匹）はそれぞれ

自分の寮へと帰っていった。

その後3人は必要最低限のことをした後、倒れるようにベットにダイブしたそう。

終わりとそれから（後書き）

…こちらは長らく投稿していなかった上に…短い！

申し訳ございません（・w・）

こちらも同様2週間ごとに投稿することにしました！

ので、みなさま…見捨てないで下さいw

昨日と今日では

次の日の朝、いつも通り6時にがんばって鳴った目覚ましの苦勞も知らず、

いつもようにナチ・クリストファーは起きなかった。

【…はあ、また起きてくれませんでした…】

ナチがぐーすか眠りこけている隣で、今日もがっくりと肩をおろす
パイ（めっさ久しぶりの登場）

がいた。

昨日もあんなに『起きろ』といったのに…

ため息をつきつつ、手馴れたぐさでナチのほっぺに平手を食らわせようとして…

「こらあああああつ！！ナチィ！！何時まで寝てやがるっ届けもんだぞっ！！！」

怒鳴り声とともに、ナチの部屋のドアが蹴破られ、黒い『何か』がパイの目の前を通り過ぎた。

と思うと、次の瞬間にはナチは背負い投げをされていた。

パイが繰り出すような平手よりも何千倍も強烈な朝の攻撃に、ナチは一瞬で目が覚めた。

「ぶはっ！！な、何っ！？」

「届けモンだ！！きのう五時半に取りに来いといったはずだろうがっ！」

混乱するナチの目の前にエマ・ハンターは仁王立ちして、手に持っていたものを

ナチの前に突き出した。

「と…届け物？」

勢いで受け取ったナチは、怪訝そうな声を上げて届け物をビリビリと破る。

すると、包みからは真新しい制服が出てきた。

白いブラウスに黒のジャケットに黒のスカートに黒のハイソックスに赤いリボン、

ジャケットには『B x G』の金文字が紋章として描かれている、ほとんど黒ずくめの制服。

「これって… B x G が着る制服ですよね」

「そうだ。おまえ今日から『B x G』なんだぞ？自覚あるのか？」

そうだ。そうだった。

戦闘系学校に通う女子の憧れの職業、『E×G』になるための資格をもつ『B×G』に。

「まったく、さつさと着がえて飯食ったら第一訓練場に来いよ。遅刻したらスクワット1000回追加な。

覚えとけよ」

エマはそついい残すなり、来たときと同様、嵐のように去っていった。

「…今何時、パイ」

「現在は午前6時。こんなに早起く起きたのは入学式以来ですね、ナチ」

「…はあ、眠い」

そうつぶやき、しぶしぶ着がえ始めた。

食堂に行くと、もうすでにイライザが朝食を食べ始めていた。

真新しい制服を着ているイライザは、ナチを見かけるなり、大きく目を見開いて固まった。

「ナチ！？アンタどうしたのよこんな早く起きるなんて…」

「エマが…」

そう言つて、真新しい制服を指差せば、『ああ』とイライザは大体は想像がついたらしく、

苦笑いを浮かべながら、朝食のクラブサンドをかじった。

ナチも、朝食を頼みに行こうと席を立つがその際、後ろを通りかかった誰かにぶつかってしまう。

「あ、ごめんなさい」

そういつて振り返ると、昨日まで一緒のクラスだったクラスメイトの鈴^{リン}だった。

「こちらこそ…ってナチ！…くっそー…『B x G』の制服じゃん、うらやましい！」

そう言いながら、悔しそうにナチの制服を眺め回す。そういえば彼女も選考に運良く参加していた。

しかし、この様子からして落ちてしまったのだろう。

その時ふと、視線を感じてナチが顔を上げると、数メートルむこうのナチと同年齢の子が

あわてたように目をそらす。

それを見て、ナチはほんの少し、落ち込んでしまう。

このバトル学園は戦闘能力、学力の合計でクラスを分ける。

一番上からB×G、SS、S、A、B、C、Dとあり、ナチは戦闘能力はこの学校の平均から

見ても、まあ高い方だ。しかし学力が下から数えたらすぐというレベルなので

一番下のクラスにぶち込まれた。

しかし今回の選考で運が良かったとはいえ、『B×G』になった。最低ランクのクラス

から、生徒の憧れのクラスへの栄転。

同学年の他クラスの人、しかも選考に出られなかった人の大半は快く思わないだろう。

…などと考えていると

「ナチ、来年こそはアタシもB×Gになってやるからねっ」

鈴がそういった声でわれに返った。

「う…うん、待ってるよ」

そして、ぎこちないが笑顔を作る。それをイライザは静かに見てい

た。

鈴が立ち去った後、ナチは朝食のセルフのパンと朝定食と牛乳をとってきて、

かなりのスピードで食べ始めた。イライザはもう食べ終わったらしく、後片付けを

するために立ち上がった。その際、

「あんたが落ち込む必要ないでしょ。」

とナチのほっぺをつまみ、ため息混じりにそう言った。

しばしの間、何のことがよくわからず、最初はぼかんとしていたが、理解したとき

思わず笑ってしまった。

さすがはイライザ。よく見てる。

ナチはひとしきり笑った後、食べ始めたときのさらに倍のスピードで食事を再開した。

その後、訓練場へいつものように二人で行った。違ったことといえ
ば、

遅刻しなかったことだった。

昨日と今日では（後書き）

…久しぶりの投稿です（・w・；）

皆さん、この作者のサボり癖とこのゲリラ的な投稿に

慣れてきましたか？（ウザイ人です）

でも！定期的に見ていてくださいねっ！！もしかしたら投稿してる
かもしれませんw

では、次回も読んでみてくださいなっ…では？（・w・ゝ）

最初の課題

午前8時、バトル学園の第1訓練場には20名弱の『B×G』が集まっていた。

今日は、新B×Gにとっては初の授業。なので、朝からみんなハイテンション気味。

まあ、当然ながらエマが入ってきているのに気づいていなかった。

「…朝から豪気じゃねえか、てめえら」

誰にも聞こえないような声で、顔を引きつらせながらエマはつぶやくと、無造作に

丸くて、導火線がついていて拳ほどの大きさの物を取り出した。それには

どくろマークがプリントしてあり、そのマークの下には『危険!』と書かれてあった。

エマは、明らかに爆発物であろうその導火線部分に、ライターで手際よく着火し、

生徒達の頭上の方へ高く放り投げた。

ぽふんっ!!

うぎゃあっ!!

数秒後、くぐもった爆発音とともに、濃密な煙が生徒達の頭上から広がり、生徒たち

の悲鳴が上がった。

エマが投げた爆発物は彼女の雇い主、この学園の校長によって

作られた『対生徒用の爆弾』で、人間が吸うと数分間笑いがとまらなくなる煙が

たつぷり詰め込まれているらしい。現に爆心地にいた生徒達は悲痛そうな笑い声を

あげている。

とはいえ、ここにいる生徒はB×G。優秀な数名の生徒は爆発寸前に脱出して被害を

免れていた。

「……つたく、生意気なやつめ」

エマは面白くなさそうにつぶやくと、免れたメンバーを記録すべく、クリップボード

を取り出してチェックし始める。

こうした、細かいことも教師によって、しっかりと評価され、今後のB×Gの

バトル大会出場権に響いてくる。

だから、B×Gは授業では常に気を抜けないのだ。

「今日から、新B×Gの授業が始まる。B×Gの授業ではさっきの様な事もビジバシと

やってくから、気を引き締めておけよ」

『はい…』

エマの言葉に、先ほど被害を受けた大多数の生徒は、苦々しく返事をした。

「よろしい。で、私はこの、1 3年のB×Gの担当することになった…私は基本スパルタ

だ。だから覚悟しとけよ」

「うへえ…」

ナチは、他の生徒のブーイングにまぎれて思わずそう漏らした。

D組のときも、エマが担任でビシバシしごかれたのに、ここに来てまたエマが担当とは。

心の中で、うすうす感づいてはいたもののやっぱり嫌だった。

「ああ？なんか文句あんのか、てめえら…」

生徒のブーイングにキレたのか、エマが腹から押し殺したような声を出す。

同時にエマは全身から薄く殺気を立ち上らせる。

それは、生徒を黙らせるには十分効果があつた。全員が身の危険を感じ押し黙る。

とたんに、エマの殺気も掻き消えた。

エマは戦闘態勢を解くと、腰に手をあて、『気を取り直して』というように

咳払いをした。

「さて、今日から授業を始めるぞ…といたいところだがお前らにはまず

授業よりも先にやってもらわなければならない事がある。… B x G
はいくつかの

チームに分かれてもらう、ということは知っているな？ そのチームをまず作れ。

それが出来るまで実技の授業はしない」

えーっ

また、生徒のブーイングが嵐のように巻き起こった。

しかし、エマはこの反応を予想していたようで、表情をかえずに嵐が治まるのを

待つてから、話を再開する。

「…とにかく、まだお互いの名前も知らないような奴がごろごろいるだろうが、

7日後までにチームを4・5人作れ。…それが最初の課題だ。せいぜい頑張れ」

エマが以上だ、といわんばかりにそばにあったパイプ椅子に腰を下ろした。

しばらく、誰も何も言わず、困惑げな表情をつかべつつ辺りを見回すだけだったが、

やがてそろそろと生徒が動き出す。ナチとイライザも二人で流されるように出て行った。

生徒が全員訓練場から出て行ったあと。

「調子はどう、エマ？」

と、突然椅子に座っているエマの背後から声が聞こえた。

振り向くと、そこには空色の瞳を持つ小柄な老婆 … 校長がいた。

「何のようです、校長。いきなりそんな所に現れて。なにか気になることでも？」

「いいえ、なにも。強いて言えば、書類の山から逃げてくるためかしらね」

校長はそういつて優雅に微笑んだ。

校長の言葉を聴いて、エマは思いきり顔をしかめた。

「またですか… まったく、私は前からあれほどサボるなど言ってきたのに」

エマのため息交じりのつぶやきに『はいはい』と校長はあっさり一蹴した。

「で、エマ今年のB×Gはどう？ 教え甲斐があるでしょう」

「… まだわかりませんよ」

といいつつ、エマはすでに気になっている生徒が何人かいた。

毎年彼女はB×Gを見てきているが、今年は新人に有望な人がけっこういる。

だから、今年のB×Gの成長が楽しみではない。

さっき出したばかりの課題のチーム作りもだ。

いったいどんなチームを生徒達は作って来るのだろうか。

「一週間後が楽しみだ」

エマはかすかに微笑み、そうつぶやいた。

最初の課題（後書き）

えーと、約二ヶ月ぶりの投稿となりました（-w-;）
毎度待っている方、いたらゴメンなさい（土下座）

今日は、やっと実力考査が終わったので一気にこれを書き上げましたw

まだまだ終わりには程遠い地点にいますね（- -）

これからスピードを上げていきたいなっと思ってますw

では 次回も読んでくださいっ（<w>）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9195c/>

B×G

2010年11月24日16時42分発行